

## 審査概要

本論文は「親鸞思想の研究—唯識思想との関係性をめぐって」とあるように、親鸞思想を特に唯識思想との関係で論究したものでありながらも、親鸞思想の核心部分を研究対象として考察しているという意味では、親鸞思想を論究する新しい試みとして評価できる論文である。以下、本論文の論述順序によりながら本論文についての審査概要を記したい。

第一章は、「親鸞における救済の構造」と題して、第一節に「親鸞思想の歴史的背景」について、『教行信証』行巻に引用する七高僧、それらの人々こそが念仏を親鸞に伝承した親鸞の歴史的背景として「正信偈」を手掛かりに論述している。これに関しては目新しい論述ではないけれども、特に本論文を展開するにあたって、なぜ唯識を必要としたかの前書きとなる部分である。第二節、第三節はそれらの歴史的背景を受けて、親鸞がいかにして信心を他力の信心として独自にその思想を展開していったのかを、「親鸞における転成思想」と、「親鸞の宗教体験としての三願転入」として問う考察である。

前者の親鸞思想における「転悪成徳」の根拠は「円融至徳の嘉号」である。その内面的な構造を考察する手だてとして、筆者は『撰大乘論』において説明される「聞熏習」をもって、その理解の一助として問題を提起している。行は「諸仏称名」、信は「衆生聞名」といわれている、その聞名の理解として「聞熏習」に注目しての論述である。当然、親鸞の深い人間認識の根底には称名念仏があることはいままでのことであるが、その転換の構造には瑜伽行唯識思想の説く「聞熏習」に通ずる「聞」の体験が在るのではないかとの問題提起である。そこに「聞」に込められた親鸞の思いの深さを後付け的に「聞熏習」を通して再考するものである。「聞」を自分の上に主体的に受け止めていこうとする筆者の姿勢が表出していると思われる。

後者の「三願転入」については、特に親鸞の重要な宗教的体験であると捉え、その転入の時期に問題を絞り、参考論文を紹介した上で、筆者は小谷信千代説を踏襲して、なぜ転入の「時」がいわゆる「永遠の今」と言われるような抽象的体験ではなく、その「今」が、つまり「転入」の時点が、三願の間にある真仮の関係を批判する論理が親鸞の中で確立することによって他力の念仏が確信された「今」に外ならないかを検討する。本論文においては特に真門から弘願門への転入に関して、小谷信千代説を踏襲して従来以上に二十願の意義を明確にして、三願転入に新しい意味を付与したと思われる。

そのことを踏まえて、第二章では、「親鸞における信心の意義」と題して、同じく唯識思想を媒介にして、第一節には「信心の業識」が、第二節には「三一問答」を論究している。第一節「信心の業識について」と題して論究した内容は、本論文のサブタイトルを「唯識思想との関係性をめぐって」と題した由縁を述べるものでもある。すなわち、親鸞は「自の業識」を「信心の業識」と現わすことによって、その信心が、「如来よりたまわる信心」であることを明らかにしている。なぜ親鸞は「如来よりたまわりたる信心」を「信心の業

識」として現わしたのか。それを筆者は『成唯識論』に説く阿頼耶識の四分義である「見分、相分、自証分、証自証分」の論理によって解釈することができると考え、信心の業識は自証分を証すものに相当すると考察している。つまり信心を「信心の業識」と表現することにおいて、親鸞が言うところの信心が、大願業力の識であることを自証することができると論究する。この考え方により、いわゆる「信心の業識」の実体化を破る論究となったことである。先行論文も踏まえて「信心の業識」が筆者の場合、『成唯識論』に由来して、論究がなされている。それは信心が大願業力の自覚を表すことであることを親鸞は業識と名のつたという解釈である。信心が自覚として表現されるのは、それが所与の心の自覚であるからであろう。

次に、大願業力の識が如来の回向による識であるとするならば、それは親鸞の言葉で言い換えれば、「如来よりたまわる信心」ということになる。そこで課題を「如来よりたまわりたる信心」の解明へと進めて、第二節では『教行信証』「信巻」に説かれる「三一問答」の普遍的意義を考察している。まぜ普遍的意義なのかと言えば、筆者は、本願の三心が信樂の一つに収められ、それを論主の一心と見定めた親鸞の「三一問答」の意義は、先行論文に見られるような捉え方はそれとして大事な了解であるけれども、唯識思想を介して、改めて、その意義が確かめられることをもって普遍的意義としている。世界は心の現われであると説く唯識思想と親鸞の思想を重ね合わせることによって、親鸞は自らが、迷いの世界を作り出す者であることを自覚して、その世界に生きる人間の心の闇を手放さないで、そこに身を据えて、如来の三心を究明した。その自覚は心の根源に阿頼耶識があるからこそ私たちは迷い、そして迷いの世界から抜け出すことができないと考える阿頼耶識論に近似している。

こういう理解を通して、「三一問答」における親鸞は、念仏によって自己の愚かさを知り、そのことにより如来の三心が我々の心の穢悪なることを反顕するものであることを明らかにし、そこに如来の大悲心が現行することを明らかにするのである、と筆者は了解し、その本願の三心により反顕される機の自覚のプロセスこそが、唯識の阿頼耶識論における阿頼耶識の三相と重ね合わせて理解することができることをもって、その問答の普遍的な意義を明確にしている。つまり筆者は本願の三心が衆生の一心として成就するとは、衆生における在悪性の自覚として反顕されると理解し、それが唯識の阿頼耶識を通して証明されることを明らかにするのである。

第三章では、親鸞思想の核心とも言える「親鸞の還相回向論」について論じている。先ず、親鸞が依拠した曇鸞の還相は、世親の『浄土論』に説かれる「出第五門」を還相として捉えて、還相ということをして「彼の土に生じ已りて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かうなり」と、曇鸞の還相回向の根拠が世親の『浄土論』にあることが明示し、それが自利利他円満の仏道を明らかにする曇鸞的方法であることを確認するのである。さらに曇鸞はその「自利利他」に説明を加え、「自利利他」の成就是阿弥陀の本願力によることを明らかにし、還相の意義

を自利利他から解釈し、還相が阿弥陀の本願力によるものであることを明らかにした、と筆者は考察する。

次に、筆者は信楽峻麿、幡谷明、小谷信千代の問題提起を受けて、還相回向を瑜伽行唯識思想の無住処涅槃という視点から考察する。この展開が従来の還相回向論の論究と本論文との違いが明確に出ているところであり、本論文の独自性をもたらしている。筆者は、先に挙げた幡谷明、小谷信千代の説を丹念に学び、大乘仏教における無住処涅槃の問題こそが曇鸞の還相回向であることが確かめている。筆者は「無住処涅槃は、大悲をもって衆生界に生きるという、大乘の菩薩行を背景として生まれた思想である。この思想こそ親鸞が「正像末和讃」に、親鸞が「南無阿弥陀仏の回向の／恩徳広大不思議にて／往相回向の利益には／還相回向に回入せり」とか、「往相回向の大慈より／還相回向の大悲をう／如来の回向なかりせば／浄土の菩提はいかがせん」と詠じている内容を成すものである」と指摘し、更に、「阿弥陀の本願力によって浄土から娑婆に還って来て、すべての衆生を救済しようとするところに親鸞の還相回向観が見えてくるのである。」と述べて、その意義を瑜伽行唯識思想の無住処涅槃によって論証するのである。

このように親鸞の還相回向が曇鸞の大乘の菩薩道成就の問題意識に重ねて、そこに無住処涅槃の意義を見いだしていく捉え方は、向後、還相回向の研究にはますます重要な観点と思われる。先行論文を踏まえ重ねて論究の必要が在るとと思われる。それにも関わらず、真宗学の土俵で仏教学的な発想を取り込みながら、親鸞思想の普遍的な意義に対して、唯識思想を応用しながら、課題を明確に展開した論文であると受けとめて「可」と評価するところである。